

天保てんぽうの虫塚

天保期（一八三〇〜四三）は凶作や飢饉ききん、疫病の流行などが続き、一揆いっぎや



埴田の虫塚

打ち毀こわしが相次いだ時代である。そうした中、天保十年（一八三九）は七月上旬まで好天に恵まれ、豊作を予期した人々は喜んでいた。しかし、お盆を過ぎても続いた暑さのため、七月中旬から石川・河北・能美郡の村々こまがで糠虫むじが大量発生し、稲が枯れ始める。糠虫とはウンカのことで、当時の農書に

「湧わくが如く生じて、稲葉の根を食い、大いに害をなす」（『除蝗録』）と解説された稲の害虫である。この害虫対策として、藩の命令でまず虫送りが行われ



虫塚の碑文

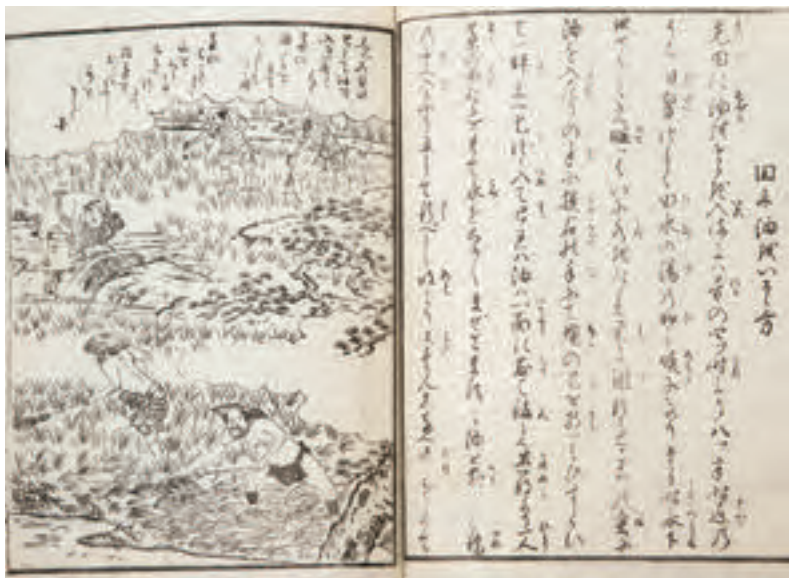


平成20年(2008)、埴田町の虫送りの様相



岩瀬の虫塚

集められた虫は、埴田村で二三俵、岩瀬村で一六俵にも及んだという。そこで、徳橋組裁許の十村田中三郎右衛門は、これらの虫を地中に埋め、供養の意を込めてその場所に「虫塚」を建てた。現存する碑文からは、虫による被害の恐ろしさとその対策法、備えの大切さを後世に伝えたいという強い意志を見出すことができ。三郎右衛門は、



『除蝗録』文政13年(1830)大蔵永常著(石川県立図書館所蔵) 鯨油を用いた稲作の害虫駆除の方法について、実例を挙げながら具体的に解説した農書。写真の図は、田に油を入れ、しなった竹で稲を押し倒し、穂先に逃げた虫を洗い落としているところ。

だが、効果はなく被害はさらに拡大していった。そこで、藩は木の実油を買上げ、それを水田にまいて油膜を張り、そこに虫を払い落として窒息させる駆除法を村々に命じて実行させた。この虫害を原因とする米の不作により、

酒造高は例年の三分の一に制限され、能美郡には一万九一六七石余、石川郡には一万八〇九三石余、河北郡には一万八八七石余の御貸米が実施されるなど甚大な被害があった。能美郡の村々でも木の実油を用いた害虫駆除が行われた。木綿袋に

のちに御扶持人十村となり俳句も嗜むなど、在地における農政の責任者でかつ知識人でもあった。こうした人物が、碑文にも挙げられた農書『除蝗録』などの実用書を参照し、地域の農業を維持・主導する役割を担っていた。

(堀井美里)